

高齢者に向けてのプレイバックシアターの活用

発表者氏名 杉山 さち子
所属 劇団縁JOY

劇団縁JOYの紹介

2013年～函館市を拠点にプレイバックシアターのワークショップ（WS）を開催
2016年～パフォーマンスグループとして「劇団 縁JOY」を設立
2018年～年1回～2回の自主公演を開催

実施の背景・意味

函館市内のサ高住（サービス付き高齢者住宅）の管理者からの依頼。自身がワークショップに参加し、語る事の良さを実感。家族と離れた生活の中で孤独になりがちな高齢者の方に人とのつながりをより感じられる機会として、劇団縁JOYがワークショップと公演を実施することになった。

施設との確認事項

- 1 目的～体験を話す・楽しむ・交流する
- 2 日時～参加しやすい曜日や時間帯、参加者に無理のない実施時間などを確認。 平日の午後 13:30～15:30 年1回
- 3 会場～サ高住デイルーム（使用可能時間・広さ・舞台の確認など）
- 4 対象～入居者 参加者数、年齢（70代～90歳代）、男女、注意点～耳の聞こえ、大きな音への抵抗、認知の程度
参加者の出来る事～体の可動範囲 特徴～歌が好きなど参加者の好き嫌いや趣味を確認
- 5 謝金～予算の確認

開催歴

2021年5月27日（木）
参加人数～6名
2022年6月16日（金）
参加人数～6名
2023年6月16日（木）
参加人数～5名
2024年6月 6日（木）
参加人数～6名

プログラムの構成

- 1 ウォームアップ
知り合う
体をほぐす
ストーリーを思い出す
- 2 プレイバックシアター
- 3 クールダウン
感想を聴く
歌をうたう

実施における工夫

- * 自己紹介。全員の声を聴く
- * 目的、時間の枠組みを伝える
- * 腰掛けたままで出来る物
- * 競わず簡単、楽しい、協力、賛同するを刺激するもの
- * ウォームアップは数種類用意する
- * 小グループに団員が入る
- * 終了時間を守る

語られたストーリーのご紹介

- ☆ 小学生の時、日本中に頭シラミが寄生して掻いていた。駆除する事になり広場みたいな場所に全員並んでDDTという白い殺虫剤を噴射された。全員頭も顔も真っ白になってしまった。とっても冷たかった。かゆくなくなればいいなあと思った。
- ☆ 4年生で学童疎開させられた。親と離れての暮らしが寂しくて寂しくて、線路を辿ったら親の元へ帰れるのかなあと思っていた。
- ☆ 東京オリンピック（1964年）の閉会式のチケットが当選！当たらないだろうと思っていたから嬉しかった。聖火が美しかった。
- ☆ 50年前、福祉の先駆け。介護職に就いた。認知症の人に泥棒扱いされたり辛いこともあったが、人の支えになっているという実感がありやりがいのある仕事だった。



今後の課題

- ※ より多くの参加者を募る方法
- ※ この取り組みを拡大するには

解決策として

- ※ 曜日、時間帯の変更。告知の回数を増やす
- ※ 横のつながりで他事業所に紹介していただく

まとめ

始まりはよそよそしい様子ながら、終盤には親しい仲間の雰囲気になっていくのがうかがえる。相手のストーリーを見ながら身をもって共感する。ストーリーが人と人を繋いでくれるのが見られる。この積み重ねが高齢者の孤立孤独を予防する一助になると考える。知らない時代のストーリーを聴かせていただけることは劇団にとって貴重な経験になっている。